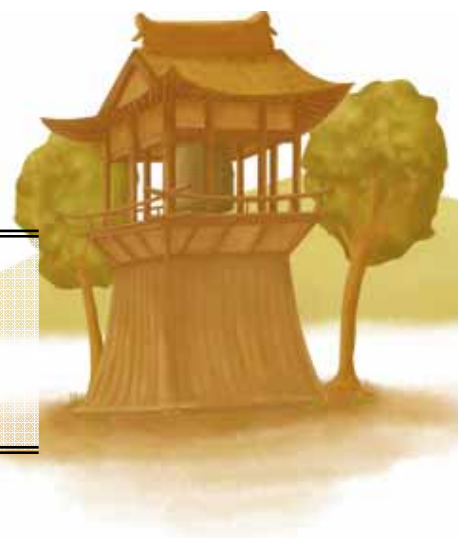


ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

神池寺の澄まざるの池
お坊さんの大蛇退治



伝説

神池寺の澄まざるの池
お坊さんの大蛇退治

紀行

蛇
・神池寺
・丹波の大蛇伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

神池寺の澄まらずの池 お坊さんの大蛇退治

丹波市市島町（たんばしいちじまちょう）の西の山上に神池寺（じんちじ）という大きなお寺があります。むかしむかし、このお寺で、子供のお坊さんがつぎつぎといなくなる不思議なできごとがありました。

いなくなった小僧（こぞう）さんたちは、みな夕べの鐘（かね）をつきに行き、そのまま帰ってこないのです。おかしいと思った和尚（おしょう）さんは、鐘つきに行く小僧さんの後を、大人のお坊さんに見はらせることにしました。

数日の間、おかしいことは何もおこりませんでした。どんよりとした雲が空をおおったある日の夕方のことです。いつものように小僧さんが夕べの鐘をつくとき、にわかにお堂の裏の林がざわざわと音をたて、中から大きな蛇（へび）が「にゅーっ。」と太い首を持ち上げてあらわれたのです。

大蛇（だいじゃ）は、そのままものすごいスピードで鐘をついている小僧さんを一のみにしてしまいました。見はっていたお坊さんは、あまりのできごとに声も出さず、腰がぬけてしまってしばらく動くこともできませんでした。

「これは大変なことじゃ。みなさん、よいお知恵はないかのう。」

この話を聞いた和尚さんは、すぐにお坊さんたちを集めて相談しました。

「大蛇は小僧を食べてしまうために姿をあらわします。ならば小僧とそっくりの人形を作って、その中に大変な毒を仕こんでおいてはいかがでしょう。」

一人のお坊さんの提案に和尚さんたちみんなも賛成して、さっそく人形作りに取りかかりました。

前に小僧さんがいなくなったのと同じどんよりとしたくもり空の日、お坊さんたちは毒を仕こんだ人形を鐘つき堂に運びました。そして、鐘をつく木に縄（なわ）をつけ、遠くはなれた大木のかげから、夕べの鐘をつきました。

「ゴォーン、ゴォーン。」

鐘の音がひびきわたります。すると、この間のようにまた裏の林がざわざわと音をたて、大蛇が首を持ち上げてあらわれたかと思うと、またたく間に人形を「バクリ。」と一のみにして、また山の中に姿を消していきました。

伝説

神池寺の澄まずの池 お坊さんの大蛇退治

しかししばらくすると、また山の林がざわざわ暴れだし、空からはゴーゴーともものすごい音をたてて大風が吹いてきました。お坊さんたちが大木にしがみつकिながら必死で様子を見つめていると、林の中で大蛇がもがき苦しみながら山の下の池へころがり落ちていく姿が見えました。

やがて風がおさまり、山ももとのように静かになりました。お坊さんたちがおそろおそろ大蛇が落ちていった池に近づくと、もとは澄んでいた池の水が、大蛇の血で赤くにごってしまっていました。

大蛇はそのまま姿を消しました。小僧さんたちがいなくなることも、もうありませんでした。お坊さんたちはまた安心して修行に打ちこむことができるようになりました。でも、池の水は、いつまでたっても赤黒くにごったままで、もとの澄んだ水には戻りませんでした。いつのころからか、人々はこの池のことを「澄まずの池」と呼ぶようになりました。

(『郷土の民話』丹有編をもとに作成)

紀行 蛇

神池寺

丹波市市島町（いちじまちょう）の東にそびえる妙高山（みょうこうさん）。その山頂近くに天台宗（てんだいしゅう）の古刹（こさつ）、神池寺（じんちじ）がある。神池寺という名前は、この伝説の舞台となった「澄まらずの池」に由来する。この池が、山頂近くにありながら、どんな大雨でも日照りでも枯れることがない、という不思議な池であることから、「神の池の寺」と付けられたという。



神池寺



澄まらずの池



澄まらずの池



常行堂

紅葉の美しい晩秋の日、ご住職の荒樋榮晋師にお寺に伝わる伝説の概要を教えていただいた。「澄まらずの池」は、境内の伽藍（がらん）からはやや離れた、神池寺会館の前にある。池の背後には昭和10（1935）年ごろに建てられた明治神宮の遥拝所（ようはいじょ）がある。池の水は、このサイトでは赤茶色に濁っているとしたが、当日は時間や季節のためか、ややどす黒く感じられた。深さはかなりあるようで、50年ほど前に底をさらったことがあったが、すり鉢状に泥がたまっていて、棒を刺しても底には届かなかったという。



常行堂前の
宝篋印塔

庫裏（くり）の近くには常行堂（じょうぎょうどう）があり、南北朝期の宝篋印塔（ほうきょういんとう）が残されている。そこから石段をあがって、門をくぐったところが鐘楼、本堂、仙人堂などがある伽藍の中心地である。

神池寺の境内へとつづく車道には、山のかなり下の方に寺域の入り口を示す標柱がある。中世までは広大な寺域の中に多数の伽藍、僧坊が建ち並び、近在の多くの子弟が入寺して繁栄した寺院であったとされていて、その面影を伝えている。しかし神池寺も、丹波のほかの多くの中世寺院と同様に、天正3～7（1575～79）年の明智光秀（あけちみつひで）による丹波攻めの中で焼き討ちにあい、大きく勢力を削減されたという。

さて、「澄まらずの池」伝説を紹介した文献の多くは、鐘突きに来た小僧さんをねらって、澄まらずの池から大蛇が登場したとする。しかしご住職の話では、大蛇は鐘楼の背後にある山から出てきたという。たしかに実際の伽藍配置から見ると、こちらの方がよく合うので、このサイトでもそのように紹介した。また、伝説の結末もお寺では、僧侶の法力によって大蛇が竜になって昇天した、としているという。



本堂

この神池寺には、「澄まらずの池」の他にも、いくつかの歴史にまつわる話が伝えられている。源平のころには平重盛（たいらのしげもり）が参詣し、寺域の北谷に一字一石の法華経を埋納したとされている。その跡とされているのが、境内からやや山を降りたところにある経塚で、今は小さな祠（ほこら）に石の地蔵がまつられ、その脇に宝篋印塔がある。



鐘楼

また、南北朝内乱に際しては、大塔宮護良親王（おおとうのみやもりよししんのう）の命令書が届き、寺の僧兵が京都の合戦に参戦したという。神池寺僧兵の参戦は、『太平記（たいへいき）』巻8にも元弘3（1333）年の六波羅探題（ろくはらたんだい）攻めの中でのこととして記されていて、これは事実と見てよいだろう。また、護良親王が奉納したという鎧（よろい）も伝わっていた。こちらは明治維新のころ、梶井宮門跡（かじいのみやもんぜき）のもとへ貸し出した後、鎌倉に創建された護良親王をまつる鎌倉宮（かまくらぐう）の神体になった。『丹波氷上郡志』（1985年復刻、臨川書店）には、明治2（1869）年に鎧が神体になったときに、政府から神池寺に渡された書類が引用されている。



仙人堂



経塚



神池寺衆徒慰霊碑



神池寺衆徒慰霊碑

丹波の大蛇伝説

よく知られているように、蛇は、古来水の神や山の神の化身として信仰されてきた。時として、人間の力ではどうしようもない猛威をふるう水の力や、縦横に平野を流れる大河の乱流が、細長く力強い蛇を連想させたのであろう。

県域にも、水や山と蛇との結びつきを示す伝説は数多い。ここでは神池寺に近い丹波市（たんばし）、篠山市（ささやまし）に伝わる蛇伝説のいくつかを紹介したい。

篠山市街地のすぐ北東にある沢田（さわだ）地区の氏神が沢田八幡神社である。ここでは、10月中旬に「はも祭り」と呼ばれる秋祭りが行われる。むかしむかし、このあたりは一面の湿地であり、一匹の大蛇が住んでいて、村人たちに長男を人身御供（ひとみごくう）として差し出すよう要求していた。しかしあるとき、この村を通りかかった一人の武士が大蛇を退治してくれたので人身御供のならわしはなくなり、それから大蛇になぞらえた八モを切る行事を行うようになったとされている。紀行文「犬と人」で紹介している猿神退治伝説と同じモチーフの話である。

また、篠山盆地全体が大きな湖で、そこに大きな竜が住んでいたという伝説も伝わっている。この竜を大神が一矢で射殺し、それから盆地の水が減って人々が安心して暮らせるようになった、という。これは、篠山盆地の水を集めて加古川（かこがわ）へ注ぐ篠山川を、竜に見立てた話と考えられている。

丹波市でも同様の話は多い。ここでは佐治川（さじがわ）・本郷川（ほんごうがわ）などとも呼ばれる加古川の上流部が、人々に恵みをもたらす川になる。丹波市山南町応地（さんなんちょうおうじ）では、「蛇ない（じゃない）」という行事が毎年行われている。あるとき、大雨が降って加古川が増水し、川を渡ろうとしていた子供が流されそうになってしまった。そのとき、川上から白い大きな蛇が現れ、兩岸につかまって橋代わりになり、子供たちを助けてくれたという。

応地の人々は、この大蛇を山の神の化身と見た。それから毎年1月9日の山の神の日に、新しい藁を持ち寄って長い蛇をかたどった綱によりあわせ、村の大年神社（おおとしじんじゃ）に奉納するようになった、という。この「蛇ない」行事は、現在は成人の日に行われている。



沢田八幡神社



沢田八幡神社



篠山川
(篠山統合井堰上流)



応地大年神社



藁の蛇が掛けられた松



応地の加古川

用語解説

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本ではとくに石塔の場合、墓碑や供養塔として建てられるようになっていた。石塔としては、鎌倉時代中ごろからの遺品が残る。形状は、方形の基礎、基礎よりも小ぶりの塔身、笠形の屋根、円筒状の相輪からなる。屋根には四隅に隅飾（すみかざり）と呼ばれる突起が立てられる。この隅飾りの開きぐあいに時代ごとの特徴がよくあらわれ、古いものほど直立し、新しいものは外側へ開いていく傾向がある。

【明智光秀】あけちみつひで

? 1582。美濃国（みののくに = 現在の岐阜県南部）の武家である土岐（とき）氏の一族とされる。越前国（えちぜんのくに = 現在の福井県東部）で朝倉（あさくら）氏に仕えていたが、永禄11（1568）年に足利義昭（あしかがよしあき）が織田信長を頼って美濃へ赴いた時に同行して信長に仕えるようになったと見られている。

以後信長に才能を認められ、京都の政務や、畿内周辺各地での軍事活動などに従事した。天正3（1575）年からは丹波攻略を命じられ、一時は多紀郡（たきぐん = 現在の篠山市）の波多野（はだの）氏を傘下に収めて、氷上郡（ひかみぐん = 現在の丹波市）黒井城（くろいじょう）の赤井（あかい）・荻野（おぎの）氏を攻めたが、翌年波多野氏の離反によって一旦敗れて撤退する。

その後天正5（1577）年ごろから再び丹波へ進出し、同7（1579）年6月に波多野氏の八上城（やかみじょう）を落とし、ついで赤井・荻野氏の黒井城や丹後（たんご = 現在の京都府北部）の一色（いっしき）氏を下して丹波・丹後を平定した。

天正10（1582）年6月、京都本能寺に信長を殺して天下の権を窺ったが、羽柴秀吉（はしばひでよし）に山城国山崎（やましらのくにやまざき = 現在の京都府大山崎町）で敗れ、敗走中に小栗栖（おぐるす = 現在の京都市）で住民に襲撃され死去した。

【平重盛】たいらのしげもり

1138 79。平清盛（たいらのきよもり）の長男。保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）では父に従って参戦。その後は清盛の後継者として順調に官位を昇進させ、仁安2（1167）年、父清盛が太政大臣を辞任するにあたって、朝廷から重盛に国家的軍事・警察権が与えられた。翌年から清盛が福原（ふくはら = 現在の神戸市兵庫区）の山荘に移ると、重盛が都において平家を代表するようになる。

しかし、安元3（1177）年、妻の兄であり、また長男維盛（これもり）の妻の父でもある藤原成親（ふじわらのなりちか）らによる平家打倒の陰謀が発覚する事件（鹿ヶ谷の陰謀、ししがたにのいんぼう）が起き、政治的に大きな打撃を受ける。その後、目立った活躍を見せないまま、治承3（1179）年7月に没した。

用語解説

【大塔宮護良親王】おおとうのみやもりよししんのう

1308 35。後醍醐天皇（ごだいごてんのう）の皇子。幼少のころに梶井門跡（かじいもんぜき）に入り、天台座主（てんだいざす）を2度務めた。元弘元（1331）年に後醍醐天皇が2度目の倒幕運動として元弘の変を起こすと、還俗してこれに参加した。建武政権成立後は一旦征夷大將軍に任命されるが、後醍醐や足利尊氏（あしかがたかうじ）と対立し、建武元（1334）年に謀反を企てたとされて捕らえられ鎌倉に幽閉された。翌年、鎌倉北条氏の残党が蜂起した中先代の乱（なかせんだいのらん）で鎌倉が陥落したとき、尊氏の弟である足利直義（ただよし）によって殺害された。

なお、播磨の守護となった赤松円心（あかまつえんしん）の三男則祐（そくゆう）は比叡山で出家しており、元弘の変では護良の配下として戦ったとされる。

また、護良をはじめとする後醍醐の皇子の名前につけられた「良」については、一般には「なが」と読まれることも多いが、近年では「よし」と読むべきとする説が有力である。

【梶井宮門跡】かじいのみやもんぜき

「門跡」とは、本来は仏法の正当な後継者を指すが、後にそうした後継者と見なされた貴族の子弟が入る格の高い寺院のことをも指すようになった。このうち、とくに天皇の子弟が入る寺院の場合は「宮門跡」と呼ばれた。

梶井門跡は、現在は洛北大原（おおはら）の三千院（さんぜんいん）のことを指すが、本来は天台宗（てんだいしゅう）の開祖最澄（さいちょう）が開いた寺院で、当初は比叡山（ひえいざん）の上により円融房（えんゆうぼう）と呼ばれていた。その後、比叡山東麓の坂本（さかもと＝現在の滋賀県大津市坂本）に移り、平安末期からは天皇家の子弟も入寺するようになり、梶井宮門跡とも呼ばれるようになった。

鎌倉・室町時代には京都市中周辺を転々としており、応仁の乱後に大原にあった政所（まんどころ）が本坊となった。江戸時代中ごろから、再び門跡自身は京都市中に房（僧侶の住居）を構えるようになり、寺院としての門跡もこの京都市中の房を指すようになっていた。現在の三千院が本坊とされたのは明治4（1871）年のことである。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
郷土の民話 丹有編	1972	編集: "郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集: 福田晃	みずうみ書房
丹波のむかしばなし 1	1998	編集: 丹波むかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
丹波氷上郡誌 下	1927 (1985復刻)	編纂: 丹波史談会	臨川書店(復刻)
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 6	2006	編集: 「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集: 「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

所在地リスト



沢田八幡神社	篠山市沢田523
神池寺	丹波市市島町多利2609-1
応地	丹波市山南町応地

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日